日帰り治療が可能な複数の選択肢

下肢静脈瘤

かしじょうみゃくりゅう

この10年間に治療法が格段に進歩し、患者の選択の幅が広がった下肢静脈瘤。命にかかわることは少ないものの、痛みやかゆみ、こむら返り、あるいは見た目の悪さなどで生活の質（QOL）を低下させる恐れもあり、早めに的確な治療を受けたい。

「5年ほど前から、両足の後ろ側、とくにふくらはぎ付近の静脈が浮き上がり、気になっていました」と語るのは、東京都在住の主婦、三山慈子さん（70歳）だ。その後、症状は徐々に悪化。静脈がボコボコと浮き上がってこぶのようになり、毎週通っているフラダンスも「みんなに見られたくない」と気が重くなり、楽しめなくなっていた。

また2年前には、見た目だけではなく、就寝中に足がこむら返りを起こして激しく痛むなど、下肢静脈瘤特有の症状も出始め、耐え切れなくなって、治療することを決断したという。

「傷がほとんど残らないと聞いていたので、最初からレーザー治療を考えていました」と三山さん。下肢静脈瘤の血管内レーザー治療で知られる東京の北青山Dクリニックを受診した。

下肢静脈瘤とは、おもに下肢の皮膚表面に近い部分の静脈（表在静脈）が浮き上がったり、蛇行しながらボコボコとこぶのように膨れ上がったりする病気だ。進行するにつれて、下肢のだるさや痛み、むくみ、かゆみ、寝ているときのこむら返りなどの症状が出る。さらに重症化すると、足に黒色の色素沈着が起きたり、潰瘍ができたり、血液が固まる血栓ができることもある。

足には、心臓から送られてきた血液を心臓に送り返す役割がある。下肢静脈瘤を引き起こす表在静脈は、その血液の通路の一つだが、血液が逆流しないよう、多数の弁が存在する（次ページのイラスト参照）。その弁が壊れ、障害を受けることによって血液が逆流し、静脈が拡張した状態が下肢静脈瘤だ。

北青山Dクリニック 院長 阿保義久医師

ただし、足には表在静脈のほかに、もっと大きな深部静脈と呼ばれる基幹静脈があり、表在静脈が逆流しても完全な血行不全になることはない。院長の阿保義久医師はこう話す。

「遺伝的な要因のほか、立ち仕事を続けている人に多く、妊娠した女性にも起きやすい傾向があります。高齢になるほど増え、男性より女性に多く見られます」

阿保医師の診断により、三山さんは、下肢静脈瘤の中でもっとも症例が多く、症状も重い「伏在静脈瘤」と、より小さな静脈にでき症状も軽い「クモの巣状静脈瘤」の混在型と判明した。しかし、クモの巣状静脈瘤は症状も見た目もさほど気にするほどではなく、本人が治療を希望していた伏在静脈瘤について血管内レーザー治療を施すことに決めた。約1週間後に再度来院し、治療することになった。

溝の口慶友クリニック 院長 岩田憲治医師

「治療時間は30分ほどだったでしょうか。痛みもなく、『もう終わったの』という感じでした。包帯を巻いてもらってその日のうちに自分の足で帰宅し、1週間だけ弾性ストッキングをはいただけ。見た目もきれいにほぼ治りました」と三山さんは振り返る。

レーザー治療も一部に保険が適用

下肢静脈瘤には複数の治療の選択肢があるが、なかでも最新の治療法が血管内レーザー治療だ。阿保医師が解説する。

北青山Dクリニック　東京都渋谷区神宮前3－7－10 アケラビル地下1階　☎03－5411－3555
溝の口慶友クリニック　川崎市高津区久本3－1－31 U-LAND溝ノ口ビル4階　☎044－850－8080

週刊朝日MOOK
「いい歯科インプラント治療医」を選ぶ！
初版 全国1302歯科医師の治療実態が明らかに！
定価840円（税込）
朝日新聞出版

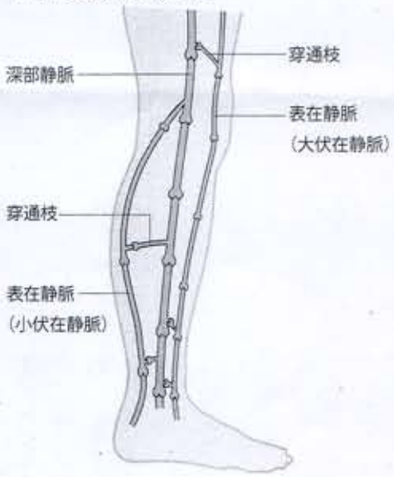
「患部の表在静脈の中にレーザーファイバーを入れ、静脈をレーザーで焼灼して閉塞させる治療法です。日本ではここ数年の間に広く知られるようになりました。当院では2005年に機器を導入して治療を始め、現在では年間2千肢近く、この方法で治療しています」

血管内レーザー治療の利点は、施術時間は片足20～30分程度、入院することなく日帰りで治療を受けられ、からだへの負担が少ない。また、レーザーは基本的に針で挿入するため、切開の必要がなく傷痕がないことなどが挙げられる。

とはいえ、いいことずくめではない。歴史の浅い治療法のため、10年を超えるような長期予後は不明。また保険が利かないため、自費診療となることだ。だが、11年1月から一部のレーザー治療に保険の適用が認められた。ただ、阿保医師は手放しで喜べない様子だ。

「保険が認められたのは、最新のレーザーではなく、3世代ほど前のレーザーです。最新鋭機に比べると、血管の処理能力が弱いので高出力で照射しなければいけません」

■下肢の静脈の模式図



表在静脈の弁が壊れて血液が逆流した状態が下肢静脈瘤の代表的症例である伏在静脈瘤だ

レーザーは波長の長さで血管の処理能力が異なるが、保険適用が認められたのは波長980ナノメートルのもの。その後、1320、1470のものが開発され、現在の最新鋭機は2千ナノメートルだ。北青山Dクリニックも最新のレーザーを導入している。

「波長が長いレーザーほど、最少の照射熱量と最短の時間で治療ができます」

からだの負担が軽減したストリッピング術

より負担が少ない治療を求める患者は多く、同クリニックでレーザー治療を受ける患者の5分の4は自費診療である2千ナノメートルのレーザーでの治療を求めるという。ちなみに、手術費用（片足）は2千ナノメートルの場合、25万円（税別）程度、保険が適用される980ナノメートルの場合、追加される硬化療法の費用を合わせると3割負担で総額8万円前後（術前、術後の検査費用などは除く）。

血管内レーザー治療に対し、これまで実施されてきた治療法が「ストリッピング」と呼ばれる手術法。表在静脈にワイヤを通して静脈を引き抜く方法だ。

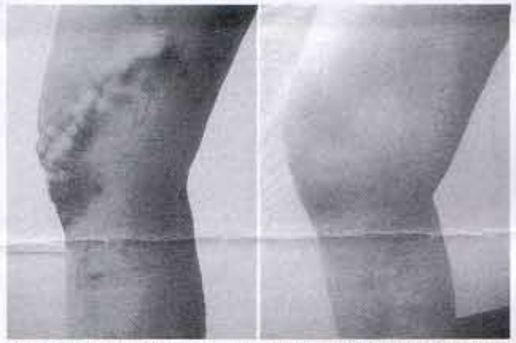
かつては「怖い手術」とのイメージがあり、入院する必要もあったが、改良が重ねられ、いまでは日帰り手術も可能で、からだへのダメージも軽減されている。

大学病院や公立病院で30年以上、下肢静脈瘤の治療に携わり、現在は溝の口慶友クリニックの院長で、年300肢を超すストリッピング術を実施している岩田憲治医師はこう語る。

「まず麻酔の進歩が大きい。かつては全身麻酔か、腰椎麻酔などの強い麻酔を使っていたため、1週間ほどの入院が避けられなかったのですが、特別な局所麻酔を使えるようになって、患者さんはその日中に歩いて帰れるようになりました」

また、事前の超音波検査で血液が逆流している部分を正確に突き止め、悪くなっている静脈だけを引き抜けるようになった（選択的ストリッピング）ほか、静脈の周囲の組織に極力ダメージを与えない手術法の改良も進み、出血や痛みもかつてに比べると、大幅に軽減されたという。

■レーザー治療の術前・術後



大伏在静脈瘤を発症し、レーザーと硬化療法を組み合わせて治療を受けた埼玉県の女性（52歳）の治療前（写真左）と治療後（同右）（阿保医師提供）

東京都在住の自営業、稲山信吉さん（仮名・60歳）は中学生のころから右足のだるさやかゆみに悩まされてきた。28歳のときには下肢静脈瘤と診断されたが、治療はせずに放置してきた。

だが、最近になって色素沈着が始まり、右足の痛みも激化。この色素沈着に至ると通常かなりの重症で、そのままほうっておくと、血栓ができたり、潰瘍を生じたりする最悪の事態にまで進行する可能性もある。

クリニックを受診した稲山さんに、岩田医師は手術をすすめ、11年6月、日帰りでのストリッピング術を施した。症状が劇的に改善し、数十年に及ぶ苦痛から解放され「うそのように足が軽くなった」と喜ぶ。

岩田医師によると、手術時間は片足30～40分程度で、レーザー治療と比べても遜色がない。保険が利き、手術費の自己負担額（片足）は3割負担で4万～5万円程度（術前、術後の検査費用などは除く）。何よりも「予後が非常によく、再発が少ないのがストリッピングの大きな利点」という。

静脈を引き抜く部分の上下2カ所を切開するため傷が二つ残ることが欠点だが、現在は1～2ミリ程度と、レーザーに比べ多少傷ができるものの、ほとんど目立たなくなっている。

こうしたレーザーやストリッピングの手術のほかにも複数の治療法が存在する。その一つが、静脈瘤に硬化剤を注入し、固めてしまう「硬化療法」。手軽に実施できる治療法だが、再発することも多く、現在ではレーザーやストリッピングと併用するのが一般的だ。

また、通常より圧力のあるストッキングで下肢を圧迫し、静脈の拡張を抑える弾性ストッキングもある。ただし、これは静脈瘤を治すものではなく、症状の進行防止や予防に使われる。

ライター・小林由枝

イラスト／今崎和広